

FLORA KANAGAWA

Jan. 1. 1992 No. 32

神奈川県植物誌調査会ニュース第32号

〒231 横浜市中区南仲通 5-60 神奈川県立博物館内 神奈川県植物誌調査会
TEL 045-201-0926・振替 横浜 3-10195



スハマソウ



ウスギオウレン

早春の花だより —スハマソウとウスギオウレン—

明けましておめでとうございます。新春の清々しい光を浴びて、路傍のナスナやハコベの花も初々しく、喜びに輝いてみえます。今号の表紙には内田藤吉先生より大山で撮影された写真を提供して頂きました。2点とも

1991年3月2日に撮影されたものです。スハマソウは県内ではこの大山(ISE-1)のほか、山北(YA-5)、藤野(FUJ-2)、鎌倉(KA-1,2)逗子(ZU)から記録されていますが、ミスミソウとの関係を検討する必要があります。ウスギオウレンは丹沢山塊から記録されていますが、古い記録にある箱根のセリバオウレンも本種の可能性があります。写真ではわかりませんが、開花していれば花の色が淡黄緑色なので容易に見分けられます。

(勝山・北川・田中)

アカザ科のハリセンボン

(*Chenopodium aristatum* L.)

(城川四郎)

今年8月25日の県立博物館標本鑑定会に吉川アサ子さんが横浜新港埠頭で奇妙な植物を採集して持参された。アカザ科であることはわかったがハテ何ものか?と首をかしげているうちに同席されていた靑山泰一先生が杉本検索誌のハリセンボンを指してこれではないかと示された。それによればヨーロッパにも分布があるということなのでその方の文献(FLORA D'ITARIA)を調べてみるとそれに間違いがないことが分かった。神奈川県植物誌1988のアカザ科の執筆担当が私だったことからこの植物について私からフロラカナガワに報告することになった。さて、報告文を作ろうと図を書いたりしているうちにこの植物にはどこかで、いつかお目にかかったことがあるような気がしてきた。少なくとも名前は初めて聞くものではない。もっとも、キノコの冬虫夏草菌の1種にミンゼミハリセンボンなどというのがあってそれも近年県内で初めて採集されたので私の頭のなかで混線しているかとも思ったがどうもそうではない。懸命に記憶の糸をたぐっているうちにその情報源は亡くなった森 茂弥先生であったことがようやく想いだされた。植物誌のための標本整理、同定、執筆と慌ただしく仕事を進めている頃、森先生も毎日のように博物館にやってくるイネ科の標本と取り組んでいた。そして植物について話し合うことも多かったなかでも彼の帰化植物についての話題は豊富であった。ハリセンボンについて彼に話を聞いたのもその頃で私は完全に忘れていたが、今回のハリセンボン報告のことから久内先生の「帰化植物」を開いてみたらハリセンボンの項に「1986.7.15 森さん」と自分でメモ書きしているのを見つけた。確かに私が森さんからハリセンボンについて話を聞いたか標本を見せて貰った証拠であるがそれ以上のことは全く思い出すことができない。1986年の時点ではアカザ科の執筆担当は森先生の予定であったから私は比較的軽く聞いていたのかもしれない。その後、森先生の体調から無理だということになって私がアカザ科も担当することになった事情もあってハリセンボンの私の頭への定着が悪かったらしいと自己弁解している。

ハリセンボンは横浜で出口長男氏が採集した記録があり、神奈川県植物誌1958には記載されてい

るが今回の調査期間中には採集されなかったのが1988年版では過去の記録として記述した。原産地はアジアの東北部ということであるがユーラシア大陸に広く分布しているようである。日本にも稀ではあるが早くから帰化しており文献をたどってみたら植物学雑誌18巻に牧野博士がこの植物についてかなり詳しく記載し、ハリセンボンを新称されている。それが面白いことに1904年のことであって今回、この標本を見てハリセンボンではないですかとおっしゃった靑山先生のお生まれになった年なのである。

1年生の小草本で10~30cmの高さがあり、単立したり、多数分岐したり環境によって変化があるようで、今回吉川さんの採集品は分岐型であったが久内氏の「帰化植物」には主軸のある単立型の写真が示されている。分岐は2又分枝を繰り返す、その分岐部に1花を着け、各枝の先端は針状にとがる。学名ではこれを芒にたとえ、和名では針とみなしたわけである。花被片5枚は0.5mmほどの長さで背面の中央に細胞多層のこぶ状隆起を持ち、この部分には葉緑素がある。花被片の隆起部以外の周辺は細胞単層で葉緑素を含まない。めしべには極めて短い花柱とそれよりはるかに長い2柱頭がある。子房はほぼ球形である。果実は扁球形で約0.75mm径の黒紫色で透明薄膜状の果皮が種子を包む。採集品からは葉が落ちてしまっており図示できなかったが葉は互生で長さ5~7cm、線状ひ針形をしており先はやや鈍形か鋭頭で基部は短い柄に次第に細まる。全縁で無毛、中脈は明らかである。なお、採集された標本(1株)の花はすべて雌花かまたはすでに結実しており雄花をみることができなかった。雌雄分化しているのかまたはアカザ科の植物にしばしば見られる雌雄のかたより(分化傾向)であろうかと不審に思っていたが牧野博士の記載の後書きにも調べた標本はすべて雌花ばかりでおしべが無かったと記されていた。

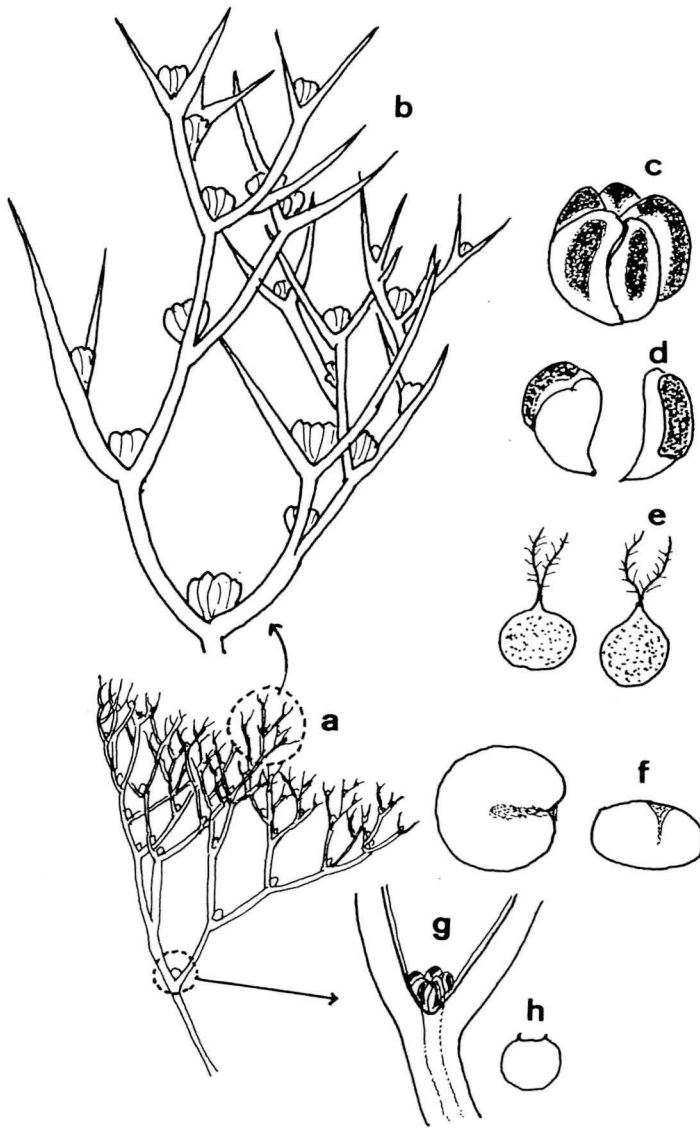


図 a 採集株の枝の1部 ×1
 b 枝のごく1部の拡大×10
 c 花 ×30
 d 花被片 ×30
 e めしべ ×30
 f 果実 約×30
 g 軸の1部約×10
 h 軸の断面 ×10

ハガワリトボシガラについて

(田中徳久)

ハガワリトボシガラ *Festuca heterophylla* は、その帰化が、杉本(1984)により静岡県から報告された。しかし、その後発刊された各県の植物誌など(初島, 1986; 大分県植物誌刊行会編, 1989; 阿部, 1990; 伊藤ほか編, 1990; 桑島, 1990; 上野編, 1991など)にはその分布は記録されていない。神奈川県においても、『神奈川県植物誌1988』(神奈川県植物誌調査会編, 1988)には、その記録がなかった。しかし、『神奈川県植物誌1988』発刊後、勝山(1990)は、北川淑子、小崎昭則の両氏が、緑区恩田町の宅地造成地で採集したことを報告している。

筆者は、現在、神奈川県植物誌調査会会員の方向によって採集された標本をもとに、神奈川県産のウシノケグサ属(*Festuca*)植物についての再検討を試みている。その際、ハガワリトボシガラについてもいくつかの知見が得られたので報告する。

ハガワリトボシガラについては、杉本(1984)の報告以後、長田(1989)が詳細な記載と図を掲載し、霧ヶ峰と富士山で採集していることを報告しており、田中・遠山(1991)は、山梨県清里高原からその分布を報告している。長田(1989)はハガワリトボシガラの同定のかぎとして、「小穂はやや大型、5~9小花よりなり、各小花の護穎の先には直立した芒をもち、内穎は護穎と同長、稈上の葉とくに最上葉の葉と、基部の葉とは形も大きさもまるで違う・・・以下略」と記している。これらの特徴のうち、他のウシノケグサ属植物(主にウシノケグサやオオウシノケグサ)との区別点として重要なのは、稈上の葉と基部の葉とは、形や大きさが異なることである。また、この他、稈上の葉の脈上にごく微細な毛が密生する点、子房の上半部は白色の長毛におおわれる点(図1)なども重要であると考えられる。

筆者は、当初、ハガワリトボシガラの標徴として、稈上の葉の大きさ、形、脈上の毛を選び、神奈川県立博物館に収蔵されている約100点の神奈川県産のオオウシノケグサの標本を検討した。その結果、稈上の葉の大きさや形については、どちらとも決めかねるものも多かったが、半数以上の標本において、葉脈上に毛が密生しているのが観察された。しかし、それらすべてをハガワリトボシガラと同定してしまうには問題があると考え、

さらに他の文献資料を検討したところ、オオウシノケグサの内巻した葉の「内面に粗毛がある」という記載(小野ほか編, 1989)や、ウシノケグサの変種であるアオウシノケグサに、「ときに葉にも軟毛がある」という記載(大井, 1982など)が見つかり、稈上の葉の大きさ、形、脈上の毛などの形質だけで、ハガワリトボシガラと同定するのは困難であると結論した。

そこで、新たに他の形質、「子房の上半部は白色の長毛におおわれる」を取り上げ、再度、全標本を検討したところ、一部の標本では子房が未熟で判然としないものもあったが、今回検討したオオウシノケグサの標本中には、子房に長毛のある、ハガワリトボシガラと同定できる標本は1点も含まれていなかった。さらに、これらの過程で、ハガワリトボシガラの実体をつかもうと、北川、小崎が緑区で採集し、ハガワリトボシガラと同定している標本と、田中が清里高原で採集し、ハガワリトボシガラと同定している標本についても詳細に検討した。これらの標本の稈上の葉には、明らかに微細な毛が密生し、葉幅も広く、根生のもとはその形態が異なり、これらの点では、ハガワリトボシガラと同定すべきのものであった。しかし、前出の多数のオオウシノケグサの標本同様、その子房は無毛であり(図2)、ハガワリトボシガラと同定するには疑問が残った。

この子房の白長毛については、長田(1989)だけでなく、HUBBARD(1984)などにも記載されており(図1)、かなりははっきりした特徴であり、単なる変異としては扱えないように思う。逆に、ウシノケグサやオオウシノケグサの葉に毛があるものが見られるのは既知のことであり、葉幅についても、その変異であると考えた方が自然である。

筆者は、以上述べてきたことから、現段階では、神奈川県下にハガワリトボシガラは分布していない、と結論した。しかし、勝山(1990)は、城川四郎氏が丹沢山地で採集していることも報告しており、筆者はその標本を検討していないので、完全にその分布を否定するものではない。隣県の静岡県や長野県に分布していることが報告されていることから、今後、さらに精査すれば、本県からも採集、記録される可能性もある。今後、ハガワリトボシガラと思われる個体を観察、採集された際には、稈上の葉の性質だけでなく、子房の毛(図1)にも注目して頂きたい。

おわりに、標本の閲覧について便宜を計って頂き、有益な御助言をいただいた神奈川県立博物館の高橋秀男氏と勝山輝男氏に厚く御礼申し上げる。また、本稿を校閲し、貴重な御意見をいただいた神奈川県立野庭高等学校の谷川明男氏と田副幸子氏、ならびに今回検討した標本を採集された、北川淑子、小崎昭則の両氏をはじめとする、神奈川県植物誌調査会会員の方々に感謝の意を表す。

引用文献

長田武正. 1989. 日本イネ科植物図譜. 759pp. 平凡社, 東京.
 杉本順一. 1984. 静岡県植物誌. 814pp. 第一法規出版, 東京.
 勝山輝男. 1990. 植物誌発刊後に記録された植物(4). FLORA KANAGAWA, 29: 294-295.
 田中徳久・遠山三樹夫. 1991. 清里・学校寮地区およびその周辺に産する草本植物. 横浜国立大学教育学部野外教育実習施設研究報告, 9: 23-49.
 神奈川県植物誌調査会編. 1988. 神奈川県植物誌 1988. 1442pp. 神奈川県立博物館, 横浜.
 大分県植物誌刊行会編. 1989. 新版大分県植物誌. 806pp. 大分県植物誌刊行会, 大分.
 上野雄規編. 1991. 北本州産高等植物チェックリスト. 365pp. 東北植物研究会, 宮城.
 阿部近一. 1990. 徳島県植物誌. 580pp. 教育出版センター, 徳島.
 桑島正二. 1990. 大阪府植物目録. 197pp.+ 4 pls. 近畿植物同好会, 大阪.
 初島住彦. 1986. 改訂鹿児島県植物目録. 290 pp. 鹿児島植物同好会, 鹿児島.
 伊藤浩司・日野間彰・中井秀樹編著. 1990. 環境調査・アセスメントのための北海道高等植物目録Ⅱ, 単子葉植物. 288pp. たくぎん総合研究所, 札幌.
 大井次三郎. 1982. イネ科. 『日本の野生植物草本編Ⅰ, 単子葉類』(佐竹義輔ほか編), 85-126. 平凡社, 東京.
 小野幹雄・大場秀章・西田誠編. 1989. 改訂増補牧野新日本植物図鑑. 1989. 30+1453pp. 北隆館, 東京.
 HUBBARD, C.E. (Revised by J.C.E. HUBBARD). 1984. Grasses, A Guide to their Structure, Identification, Uses

and Distribution in the British Isles. 476pp. Penguin Books Ltd., Harmondsworth.

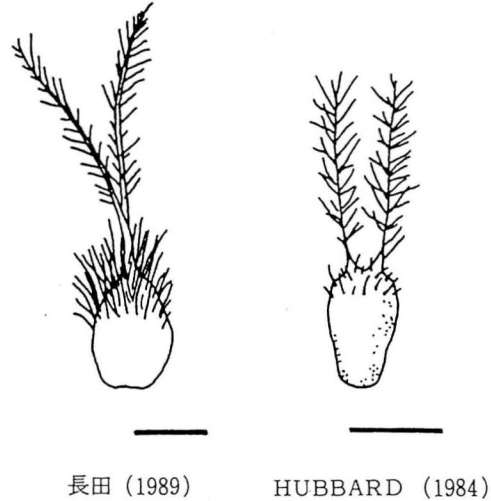


図1 長田(1989), HUBBARD(1984)に掲載されているハガワリトボシガラの子房の図(それぞれから改写;スケールは1mm)。

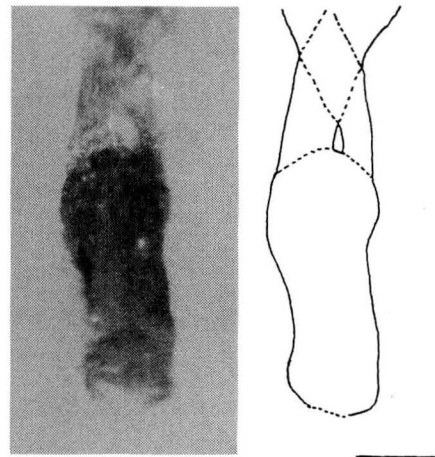


図2 北川, 小崎が採集し, ハガワリトボシガラと同一している標本(FLK 103336)の子房(スケールは0.2mm)。

神奈川県産の植物補遺(2)

(小崎昭則)

箱根に自生するハタベカンガレイ* (第1報)

1989年8月7日、勝山輝明氏のご案内で北川淑子氏とともに箱根の仙石原を訪れた。その際、湿原の中を緩やかに流れる小さな溝辺に「ヒメカンガレイ」に似た植物が生育することに気がついた。小穂は未熟であったが、一部を持ち帰って調べてみると、柱頭が2個で安定していた(勝山氏の採集した2点の標本のうち1点は、後に柱頭3個であること知った)。葯の長さ(1.3mm前後)もカンガレイ、タタラカンガレイ、幾つかの文献に記されたヒメカンガレイなどと異なっていた。いわゆる雑種にはみえなかったことから、これまでに記載された分類群とは異なるものであろうと推定し、一先ず“箱根カンガレイ”として整理した。

ところがその後、これと同種と考えられる“カンガレイ”が熊本県において既に佐藤千芳氏によって発見され、ハタベカンガレイ(本種の生育する阿蘇の端辺原野に因む)と仮称されていることがわかった。(1991年11月28日付の同氏からの私信によれば、数年前、福岡の研究会の席でお話しをされたという。この時の資料は、別の方から送っていただき、既に私の手元にあった。その後、同氏は今江正知氏との共著の形であとに示す報告を発表し、その中の特記すべき植物の項で本種を紹介している)。また最近、栃木県でも野口達也氏により同様のものが見い出された(栃木県立博物館で開催された「すげの会」第1回全国大会で“ナスノカンガレイ”として展示された。柱頭は2個であったが、その他の点については、詳しく観察する機会を得ないので不明である)。

1990年9月1日、勝山氏と再び同地を訪れたが、熟した果実を得ることはできなかった。当日の様子は次のとおりである。流れの幅0.5m、水深10~20cm程で、多少淀んでいた。本種は延長8m位の間に計5株確認され、岸寄りに少し水に浸かった状態で生育しており、各株に共通して茎の倒伏がみられた。倒れて水中に没した茎の中には小穂をつけたものがあり、さらに注意してみると、一部の小穂の基部から芽生したものが観察された。付近にはチゴザザ・ヨシ(高さ1.5m位、疎生)・サワヒヨドリ・チダケサシ・ヌマトラノオ・フジなどが生え、上部にニシキウツギ・マユミ・サワフタギの枝が張り出していた。

本県産の検討資料を得る必要と個体群維持に対するリスクの軽減から、まず増殖を心掛けることにした。今年6月、被圧されて生育状況が思わしくない1株を、井上香世子氏にお願いし、湿生花園内の適当と思われる場所に3つに分けて植えていただいた。うち1株が期待どおりに出穂し、今秋、多数の果実を稔らせた。僅かではあるが、資料が得られたので、わかった点を整理しておく。比較のための標本ならびに文献をお送りくださった佐藤千芳氏に厚くお礼を申し上げる。この標本は神奈川県立博物館に収める。

柱頭数…2個のものが多い。稀に3個。個体による違いが大きい。

葯の長さ…1.25~1.45mm。1.3~1.35mmが目立つ。

小穂の鱗片の長さ…4.0~4.5(~4.7)mm。

刺針の数…7本のものかなり多い。他は6本。

端辺産では稀に5本の例を観察した。

刺針の長さ…2.5~2.8mm。突出部を含めた果体とはほぼ同長。

花柱の長さ(柱頭2個のもの)…2.4~2.6mm。

柱頭の長さ(柱頭2個のもの)…1.45~1.8mm。

果体の長さ(突出部を除く)…1.9~2.0mm。

果体全体の長さ…(2.0~)2.1~2.2(~2.3)mm

果体の幅…1.8~1.95mm。

果体の表面の模様…横皺はやや明瞭。タタラカンガレイと比べると、やや不明瞭である。

果体上部の輪郭(突出部を除く)…ほぼ切形。端辺産では円形に近づく。

根茎…ごく短く這う。

茎…断面は鋭三稜形。あまり硬くない。

<文献>

佐藤千芳・今江正知, 1990. 阿蘇外輪山およびその周辺地域の湿生植物社会の植物相について. 熊本大学教養部紀要 自然科学編 第25号: 177-206.

横浜市のコイトスゲ

旭区都岡町で昨年6月に採集したスゲの一種が気にかかり調べ直したところ、横浜市域では初めての報告となるコイトスゲ *Carex sachalinensis* Fr. Schm. var. *iwakiana* Ohwi と判明した。採集地は本誌28号で報告したナンゴクナライシダ(昨秋、この産地は自然公園建設のために埋め潰された)の発見地付近である。

保土ヶ谷区のイトアオスゲ

本県では山地部に偏って分布する傾向のある種類で、どちらかといえばあまり乾燥しない草地に出現する傾向がある。今年5月、川島渓谷（川島町）にスゲ類の観察に出かけたところ、渓谷沿いに張り出した凸型の急斜面や崖の肩に、ほぼ限定された状態で、少数の本種が生育することに気がついた。生育状況はまさに残存的で、すぐ近くの同様な光条件の所でも緩斜面や小道脇などでは、見つかるアオスゲ類はメアオスゲばかりであった。同渓谷のワニグチソウ・シュロソウ・オクモミジハグマ・フシグロセンノウ・ヤブムグラ・オタルスゲ・タニギキョウなどととも注目したい。

チャボチヂミザサ

昨年から今秋にかけて、横浜市旭区内の人工林下2カ所（矢指町、川井宿町）で本種と考えられる小群を見出した。同所的に見つかるコチヂミザサ、ケチヂミザサと比べて葉が明らかに小さく、長田武正氏の『日本イネ科植物図譜』p.544に示された説明内容とほぼ一致する（ただし、葉面の毛の量についてはそれよりも多い印象を受けた）。注意されにくい種類であるためか、産地はあまり紹介されないが、関東地方では下総台地（佐倉市郊外）の人工林下でも採集したことがある。

アイヒメワラビ

ヒメワラビとミドリヒメワラビの雑種で、1981年に *Thelypteris* × *subviridifrons* Serizawa として正式に記載された。基準産地は東京都町田市成瀬である。本県では1988年10月に山本明先生が大和市下鶴間のスギ林内で1株を見出された（野草No. 429: 36, 1989）が、他では川崎市域における報告（日本ツダの会会報, Vol.2, No. 86: 8-9）を目にした程度である。今秋、4回ほど近隣地域を調べたところ、座間市入谷（1株）、旭区矢指町2カ所（1+6株）、緑区三保町（5株: MI-1）、同区新治町2カ所（1+13株: MI-1）、戸塚区弥生台（1株、採取し忘れたが、ヒメワラビ少数株やフモトツダも確認した。TO-1）、瀬谷区東野（4株）などでも本雑種を記録することができた。また、昨年採取した保土ヶ谷区川島町産のヒメワラビ類の標本の中にも1点混じっていた。発見状況からみて、とく

に生じにくい雑種ではなさそうである。参考までに、両親種の区別点や雑種の特徴について整理しておく。

[葉面の色]

生育環境の違いによるそれぞれの種の色の变化を把握した上で、比較する必要がある。野外では最初の識別点になる。

A: ヒメワラビ……鮮緑色。

B: ミドリヒメワラビ……黄緑色。

C: アイヒメワラビ……中間的。

[羽片の着き方]

A: 葉軸に対して斜上する。この点が関係して、各羽片の上側第1小羽片は、葉軸に沿うような恰好のなる傾向がある。逆に下側第一小羽片は「ハ」の字形に開くような形になる。

B: 葉軸に対してより広い角度で着く。第一小羽片はとくに上記のようにならない。

C: 中間的。

[小羽片や終裂片の着き方、長さ]

A: 小羽片は羽軸に広い楔形をなして沿着する傾向が強い。小羽片や終裂片は、それぞれが着く軸に対して上側が長く、下側が短くなる傾向がある。

B: 小羽片は、短いが柄が明らかで、羽軸に対してより広い角度（直角に近づくことが多い）で着く。小羽片や終裂片の長さは上下ほぼ対等。

C: 中間的。

[葉柄下部（基部付近）の毛の様子]

これに似た傾向が、羽軸分岐点付近を除く葉軸下面でも認められる。

A: 表面はしばしば粉白を帯びるが、毛はほとんどない（向軸側に少し毛の現れることはある）。

B: 周囲に開出する白短毛が多く（肉眼でも見える）、白っぽく見える。

C: 毛が現れても、その密度は低い。

[孢子と孢子のう、孢子のう群]

A: 孢子が成熟すると（よく熟すと濃褐色に色づく）、孢子のうは裂開する。したがって孢子のう群の形は崩れる。

B: Aと同様。

C: 孢子は不稔性（孢子のうによって多少色の濃淡がある）で、孢子のう（全体として淡褐色〜褐色）はほとんど裂開しない。したがって、孢子のう群の形は、葉が枯れる直前でもほとんど崩れていない。

〈文献〉

芹沢俊介, 1981. 日本産シダ植物雑記(二). 植物地理・分類研究, Vol. 29 (1): 22-25.

前号の補足

本誌No. 31のp.336-337に勝山・北川の両氏がスナジスゲのことを報告されたが、埼玉県産の標本もある(小崎昭則:1987年5月23日採集,北埼玉郡北川辺町.水田地帯を通る農道と休耕田の間のややしまった土の所.砂地ではない).ビロードスゲと思って採集し,仮整理のままにしていたところ,北川氏が教えてくださったものである.両種の区別点については,前号のとおりであるが,慣れると基鞘の色(スナジ…紫紅色;ビロード…紅紫色)や果期の違い(スナジの方が半月〜1カ月位遅れる)も参考になる.この標本も神奈川県立博物館に収める.

県西の植物〔1〕

(長谷川義人)

1. トウゴクサバノオ

Dichocarpum trachyspermum (Miq.)

W. T. Wang et Hsiao

南足柄市三竹の御嶽神社内に発見した. 地域新. MAY.1,1991 (MIA-3)

2. ヒトツバテンナンショウ

Arisaema monophyllum Nakai

県内は清川,山北の記録があるが,足柄の夕日の滝で採集した. MAY.11,1991 (MIA-1)

3. シロバナショウジョウバカマ

Heloniopsis nipponica (Ohwi) Nemoto

津久井・清川・愛川に限られてあるが,夕日の滝の左側テラス上にあるものが本種であるように見受けた. 1株のみで採集は控えた. 県内にはショウジョウバカマは未発見なので多分本種であろう. MAY.11,1991 (MIA-1)

4. シラコスゲ *Carex rhizopoda* Maxim.

これも夕日の滝の下の河原にある. MAY.11,1991 (MIA-1)

5. ミノボロ *Koeleria cristata* (L.) Pers.

県内の産は極めて少ない. 湯河原町鍛冶屋の幕山山頂部に記録した. JUN. 8,1991 (YU-2)

6. ムラサキクララ

Sophora flavescens Aiton form.

purpurascens (Makino) Sugimoto

幕山下部の草付きに淡黄色の花でない,淡紫褐色を帯びた花を持つクララを見た. 久内清孝先生

がかって筆者に大磯周辺には桃色の花を持つクララがあると話されたが,これと同じものと考える. モモイロクララの和名がよいと考えたが,すでに表記の名前があり,同じものとする.

JUN. 8,1991 (YU-2)

7. コカラスザンショウ

Fagara × *fauriei* Nakai

鍛冶屋の新崎川上流幕山堰堤の近くで発見した. 3m位の木で全体がカラスザンショウを小さくした感じのもので枝は細い. 刺や樹皮はイヌザンショウに近く両種の雑種と考える. 多分,東限は伊豆半島と記憶している. 県内新記録. JUN. 15,1991 (YU-2)

8. コバノヤブムラサキ

Callicarpa mollis Sieb. et Zucc.

form. *ramosissima* (Nakai) Sugimoto

鍛冶屋の浄水場対岸にあり,葉の小さいもの. 火山変形(Volcano-morphose)植物の一種と考えられる. 湯河原町宮ノ上にも記録があると云う. JUN. 15,1991 (YU-2)

9. アラゲミゾシダ

Leptogramma pozoi (Lag.) Nakaike

ssp. *mollissima* (Kunze) Nakaike

form. *pilosissima* (H. Ito) Nakaike

湯河原町鍛冶屋で記録した. 羽軸にも葉面にも毛が多く,特に下面に長い毛が密生している. 県内では稀. JUN. 15,1991 (YU-2)

10. イヌハッカ *Nepeta cataria* L.

大野山中腹の鍛冶屋敷で採集した. 山頂部の牧草から出た帰化品であろう. JUN. 29,1991 (YA-8)

11. タニジャコウソウ

Chelonopsis longipes Makino

松田町,寄虫沢の太尾沢に大群落がある. JUL. 28,1991 手前の名納沢にも少量ある. AUG. 25,1991 いづれも地域新産となる. (MAT)

12. オオギカズラ *Ajuga japonica* Miq.

寄の虫沢の中央本谷と名納沢で見出した. AUG. 25,1991 (MAT) 鍛冶屋の城山山系シトドの窟附近にもある. NOV. 4,1991 (YU-2) 県内では比較的稀である.

13. キジオノオシダ

Plagiogyria japonica (Nakai) Makino

名納沢に少量ある. 地域新産. AUG. 25,1991 (MAT)



神奈川県植物誌標本

No. _____ Fam. No. _____

市、区、町、村 陽向原町 採集地コード YU-2

学名・和名 _____

コカラズザシロウ

測定者 長谷川義人 測定年月日 _____

メッシュ内の地名 鍛冶屋 新崎り上流

採集年月日 JUN. 8. 1991

採集者 長谷川義人

備考 幕の堰堤村の外下流側。

14036

14. ヤマトキシソウ

Pogonia minor (Makino) Makino

幕山の山頂直下の防火帯のススキ・マルバハギの中で発見。筆者の先導によるルートファインディングでススキの藪漕ぎ中に後続の塩入肖が発見した。箱根での古い記録があるが植物誌調査発足後県内初記録。10株位があり標本を採取した。SEP.15,1991 (YU-2)

15. ハコネセンニンソウ (新称)

Clematis terniflora DC.

form. *hakonensis* nom. nov.

小葉は狭長で、多分火山変形植物と考えられる。幕山で記録。SEP.15,1991 (YU-2) 箱根産のものが県博に所蔵されている。

16. シロバナヤマジロ

Mosla japonica (Benth.) Maxim.

var. *thymolifera* (Makino) Kitam.

南郷山下の白銀林道にあるものはこの変種に相当するかも知れない。SEP.15,1991 (YU-2)

17. コガシワ

Quercus × *takatorensis* Makino

カシワとコナラの雑種。湯河原鍛冶屋の五郎神社上の登山道左手に1本あり、稲村毅が発見した。SEP.15,1991採集 (YU-2) 県内には稀にある。学名は大磯町の湘南鷹取山で三浦でない。

18. ハコネクサアジサイ

Cardiandra alternifolia Sieb. et Zucc.

var. *hakonensis* Ohba

城山中腹で1本、白銀林道(白糸川~根府川林道間)で拾数株の対生品を見た。城山のものは他はすべて互生であり、自然誌資料の報告(大場達之)のように踏付による異常と考えるが、白銀林道の産地は対生葉のものが多く、互生葉は僅かであった。本変種は更に研究の要があると考えられる。OCT.6,1991 (OD-4)

19. ホウライカズラ

Gardneria nutans Sieb. et Zucc.

植物誌のプロットは三浦鎌倉と伊勢原のみで湯河原-1に記録があるのみ。鍛冶屋のシトドの窟の下で貧弱な個体を採取したが、県西部では稀なもの。NOV.4,1991 (YU-2)

20. イズカニコウモリ

Cacalia amagiensis Kitam.

白銀林道白糸川近くで高橋秀男の発見以来星ヶ山中腹のみと考えられていたが、今度は城山山系シトドの窟近くで大量のイズカニコウモリを発見

した。県内第3発見地、メッシュ新産。NOV.4,1991 (YU-2) 広範囲に50~60株の単葉があり、本年は開花株はなかった。第2発見地の根府川林道終点の産地も第1発見地も本年は開花株は見られなかった。本種は開花すると株が枯死する一稔性の性質があるのではないかと推測される。生活史の研究が必要である。なお第1発見地は(OD-4)で第2発見地は(MAN)であるように考える。

21. ハコネイトスゲ

Carex hakonemontana Katsuyama

シトドの窟附近の岩上にあるものも、本種のようにである。NOV.4,1991 (YU-2)

22. オオウラジロノキ

Malus tschonoskii (Maxim.) Schneid.

足柄峠より金時山への登路左側で1本を見た。NOV.13,1991 (MIA-1)

23. コハチジョウソダ

Pteris oshimensis Hieron.

風祭の谷には現在も20~30株を越える生育が見られる。健在を報告する。DEC.1,1991 (OD-2)

24. オオパチドメ

Hydrocotyle nepalensis Hook.

コハチジョウソダの谷に多量にある。DEC.1,1991 (OD-2)

25. ナガバヤブソテツ

Cyrtomium falcatum (L. f.) Pr.

var. *devexiscapulae* (Koidz.) Tagawa

房総半島などでは珍しくもない本種であるが、小崎昭則が本誌に報告したように県内では多くないであろう。久野にあったものが本品であろう。DEC.1,1991 (OD-1)

26. ヤマグルマ

Trochodendron aralioides Sieb. et Zucc.

金時山の北斜面の岩場に何本もある。地域新産。県内の分布は極めて限られている。NOV.13,1991 (MIA-1)

27. 奥津均氏よりの報告 8月6日付(私信)

箱根湯坂道附近でヒメヤブラン、ノリウツギ、ナベワリ、スズサイコ、ギンリョウソウ、オオナンパンギセル、コバノカモメヅル、アリノトウグサ、シロバナイナモリソウを記録した。写真をとったとのことであるが、是非とも次回には標本を採取していただきたいと考える。

[DEC.3,1991 記]

ハコネイトスゲについて

(勝山輝男)

箱根、愛鷹山、伊豆天城山の林内岩上や暗い林床には、イトスゲよりも葉が繊細で幅0.5mm以下、しかも雌小穂の苞葉が刺状できわめて短いスゲがある。神奈川県植物誌ではこれをイトスゲの新変種と考え、ハコネイトスゲと仮称した。その後、各地のイトスゲの形態と比較してみた結果、ハコネイトスゲは箱根、愛鷹山、伊豆天城山などに分布に限られること、標高1,200m位の林内でイトスゲと混生する場合もあるが、標高600m～1,200mまでの林内の苔むした岩の上にはハコネイトスゲしか見られないこと、混生地でも下記のような違いで見分けることができ、形態的にも中間形がないことがわかった。そこで、ハコネイトスゲはイトスゲとは異なる新種であると考え、神奈川県立博物館研究報告自然科学20号に *Carex hakonemontana* Katsuyama と命名し記載を書いたのでここに報告する。

イトスゲの内側(上方)の葉も外見上は幅0.5mm以下になるが、これは葉が内巻または強く2つに折れるためである。新鞘の外側(基部)の短い葉身は二つに折れることはなく、平坦で幅1mm近くある。苞葉は普通小穂よりも長い、稀に短いものも見られる。しかし、この場合でも苞の葉身は鞘部よりも長い。

一方、ハコネイトスゲの葉はきわめて細く幅0.5mmを越えず、葉の上面が多少弧を描いて凹むが、内巻したり二つに折れることはない(植物誌では内巻としてしまった)。しかも新鞘基部の葉も細く幅0.5mmを越えない。苞の葉身は刺状できわめて短く、鞘部よりも短い。その他にも雌小穂の数が1個で、生育が良くても2個まで、稀に根生雌小穂をつけること、雌小穂の花数が3～4個と少なく、最大でも6個まで、果胞の嘴がやや短いこと、基部の鞘の褐色が強いことなどがイトスゲと異なる。

◎FLORA KANAGAWA のバックナンバー
1～24号 一括5,000円(会員4,000円) ただし、在庫のない号はコピーです。
25, 27, 30号 各1,000円(会員800円)
28, 29, 31号 各 500円(会員400円)
26号 300円(会員250円)

キダチハリナスビについて

(勝山輝男)

吉川さんが西区楠町でキダチハリナスビを採集されました。ハリナスビによく似た種類ですが、多年草で高さ2m、茎の直径5cmになります。これまでに港北区で採集されていますが、植物誌では原産地等不明でした。この機会にもう一度調べてみました。ニュージーランドの帰化植物を集めた FLORA OF NEW ZEALAND Vol. I が出たので、これを調べたところ1年生のハリナスビ *S. sisymbriifolium* に対して、多年生の *S. linnaeanum* Hepper et P.M. Jaeger が出ていました。最近刊行されたハワイの MANUAL OF THE FLOWERING PLANTS OF HAWAII にも出ています。熟すとがくが反り返って果実が完全に露出する点も一致しますので、キダチハリナスビは *S. linnaeanum* と判明しました。原産地は南アフリカで、地中海沿岸、オーストラリア、北アメリカ、ハワイなどに帰化しています。吉川さんがとられたものはまだ結実していませんので、後日もう一度採集するようにお願いしていましたが、残念なことにこのキダチハリナスビは結実する前に伐採され、そこは駐車場になってしまいました。この植物は *S. sodomeum* L. または *S. hermannii* Dunal として知られていましたが、F.N. Hepper & P.M. Jaeger (Kew Bull. 14(2): 434-435) により、これらのタイプ標本は *S. indicum* L. とされ、上記の学名が新たにつけられています。

初山泰一先生の米寿を祝う。

わが国植物学界の長老であり、私たちの神奈川県植物誌調査会の顧問としてご指導を頂いている初山泰一先生は1904年のお生まれで今年は数え年の88才になられる。植物学界には長寿の方が多くもお聞きするがそれにしても米寿でなおかくしゃくとして植物の研究を楽しむことのできる方は稀である。初山先生は「坂道さえなければどこだって歩きますよ」とおっしゃるくらいお元気で、博物館に出向き標本を広げて検討されるご様子は現役の研究者のお姿そのものである。心から先生のおすこやかな米寿をお祝い申し上げたい。これからもご健康には十分留意して頂いて少しでも長く私達を指導して頂きたいと念願する。(城川)

追悼 森 茂弥先生を悼む

森 茂弥先生が1991年9月25日に亡くなりました。

森先生は1979年に植物誌の調査が始まると、横浜北・川崎ブロックの代表者になりました。調査が始まると標本がたまっていくのですが、当時はまだ県立博物館の標本受け入れ体制が整ってはおりませんでした。そこで、森先生の提案で横浜、川崎ブロックの標本を鶴見高校に集め、同定・分類し、チェックリストを作ることにしました。吉川さん、内藤さんと生物実験室に標本を並べて整理した頃のお元気の森先生の姿が懐かしく思い出されます。当初、森先生は鶴見区や神奈川区などを責任メッシュにしていたのですが、しだいに調査の遅れているメッシュに進出され、川崎市の各メッシュから県北の藤野や相模湖方面、山北や箱根方面まで足を伸ばして調査されました。しかし、1983年秋に膀胱を患い、やがて数時間におよぶ大手術を受けられました。手術後、体調が良いときにはよく県立博物館へ来られ、イネ科を中心に標本の検討をされていました。そこでチャボノカタビラ、ミスジナガハグサ、モリシラゲガヤ(後にニセシラゲガヤに訂正)、クサビガヤ、ナンカイヌカボ、ヤクナガイヌムギなど日本新産

の帰化植物を新称されました。植物誌の刊行にあたってはイネ科やヒユ科などを担当され、1987年暮れから1988年正月には植物誌の版下作りにも参加されました。貧血が激しかった森先生は博物館の地下から3階の共同作業室まで登るのに苦労されていました。その後、鶴見高校に復職されましたが、一昨年退職されています。退職後もたびたび、入院退院を繰り返していたようですが、体調の良いときには県立博物館に顔を出されていました。8月末に電話をいただき、また入院していることを聞きました。森先生が外泊される日にあわせて、会員の小崎さんと御自宅へお見舞いに行きました。この時に森先生は近所に生えているイラクサ科の新しい帰化植物(すでに地中海原産の *Helxine soleirolii* と解明され、コケイラクサと新称されていました)を採集に行かれ、私達に紹介してくれました。これが森先生最後の植物採集になってしまいました。

森先生の棺には最後まで研究に余念のなかったイネ科植物のオギ、ススキ、アキノエノコロ、メヒシバなどが入れられました。病氣と戦いながらの植物誌刊行、本当にご苦労様でした。

森先生の御冥福をお祈り致します。(勝山)

神奈川県に関する文献紹介

大和市の植物 大和市動植物総合調査報告書2

1991年3月 大和市教育委員会

平塚市博物館 特別展図録「タンポポと春の花」

平塚市博物館

浜口哲一 神奈川県におけるタンポポ属の2倍体と倍数体の分布 平塚市博物館研究報告「自然と文化」No. 14:111-118

浜口哲一 神奈川県におけるカントウタンポポも地理的変異とその背景についての考察 平塚市博物館研究報告「自然と文化」No. 14:119-136

浜口哲一・佐藤恭子 平塚市周辺地域におけるイヌムギとヤクナガイヌムギの分布状況 神奈川自然誌資料(12):61-64

大森雄治 タチアマモとオオアマモの花枝と葉の形態 横須賀市博物館研究報告[自然](37):55-59

勝山輝男 日本産スゲ属の1新種 神奈川県立博物館研究報告(20):1-9

勝山輝男・高橋秀男 神奈川県におけるサツキの分布状況 神奈川自然誌資料(12):57-60

高橋秀男 日本産コゴメウツギ属の新変種・新雑種 神奈川県立博物館研究報告(20):11-17

飯田 和 小田原付近における新出植物の知見

〈その2〉 小田原市郷土文化館研究報告

No. 26 (自然科学 No. 13):1-13

松浦正郎 神奈川県西部における帰化植物(2)

一芦ノ湖のコカナダモーこのやっかいな侵入者

小田原市郷土文化館研究報告 No. 26 (自然科学

No. 13):17-25

大森雄治・菅原 敬 横須賀市野比の植物相と自然環境評価 横須賀市博物館研究報告[自然]

(38):29-42

大森雄治・林 公義 三浦半島沿岸のウミヒルモ(*Halophila ovalis*)の分布と生育状況

横須賀市博物館研究報告[自然](38):109-

110

◎編集後記

昨年11月中旬に発行する予定が大幅に遅れ、申し訳ありません。遂に正月になってしまいました。次号は何とか3月中に発行したいと思いますので、よろしくお願いします。

(編集担当 勝山・北川・田中)